

桃太郎の話

溝口貞彦

はじめに — 問題の所在

日本昔話で、最もよく知られている話の一つは「桃太郎」であろう。いろいろな地域に、桃太郎の古里がある（愛知県犬山市や香川県高松市鬼無町など）。その中でも有名なのは、岡山市である。桃の有数の産地だから、「桃太郎の故郷（ふるさと）」と自称するようになったらしい。

桃太郎について論じた優れた評論も少なくない。その代表的なものに、柳田国男の『桃太郎の誕生』がある。それは、とくに「小さ子」（異常に小さい子）ということに焦点をあて、一寸法師や、瓜から生れた瓜子姫と対比して、桃から生れた桃太郎について論じている。

柳田国男の論文で、一番参考になったのは、昔話を、古代に形成されたものと、近代になって定形化されたものとの二種に分類していることである。すなわち、昔話には古代に「成熟した形」をとっていたものもあるが、近代になって「急に成熟し、元の形が不明になった」ものもある。後者の代表としてあげられているのが、桃太郎である¹。

桃太郎の話は、室町時代にできたとみられるが、私のみた民話の中にも、桃太郎の話と花咲爺の話が混同しているものや、

桃太郎と猿蟹合戦が混線しているものなどがあつた。⁽²⁾ それらはまだ現在の桃太郎成立以前の、混沌期の話を受継いだものと考えられる。

童話の中には、明治になって、巖谷小波の『日本昔噺』⁽³⁾ (一八九四) によつて再話されたとき、形の決まったものが少なくない。とりわけ「桃太郎」がそうであつた。現在の形の桃太郎が成立したのは、明治になってからであり、特に小波版によつてであつた。

柳田国男の『桃太郎の誕生』や石田英一郎の『桃太郎の母』は、該博な知識にもとづき、桃太郎に関連する世界各地の民話を取り上げており、多くのことを学ぶことができるが、しかしこれらは、私がポイントと考えるところについて論及していない。

ここでは次の三点について、論じてみたいと思う。

- 一、「桃から生れた桃太郎」——なぜ桃か。
- 二、お供の犬・猿・雉は、何を表しているか。
- 三、鬼とは何か、そして鬼が島はどこにあつたか。

第1節 「桃から生れた桃太郎」の検討

一、なぜ桃か

1. 桃で鬼を祓うこと

(1) イザナギの故事

古い伝説によれば、桃には鬼を退ける呪力があつた。ここで一つ思い出されるのは、記紀にイザナギ(伊邪那岐)が、亡

き妻イザナミ（伊邪那美）を訪ねて黄泉よみに下る話である。イザナミの死体が腐乱し、蛆うじがわいているのを見て、イザナギが驚いて逃げ帰るのを、千五百の鬼たちが追つてくる。イザナギが黄泉比良坂よみのひらさかまで落ちのびると、桃の木があったので、その実を三つ投げつけると、鬼たちはいつせいに逃げていった。『日本書紀』は、「此れ桃を用い、鬼を避けるの縁ゆえんなり」と記している。それは、桃には鬼を斥ける力があると信じられていたことを示している。

(2) 追儼 — 鬼祓いの儀式

奈良・平安時代には、毎年十二月末（大晦日）に宮中で「追儼ついな」という「鬼を祓はらう儀式」が行われた。『続日本紀』によれば、「文武天皇慶雲三年天下諸国疫疾し、百姓多く死せるを以て、初めて朝廷に於て此の儀式を行はせられたり」とある。

追儼（「鬼やらひ」ともいわれた）は舍人に鬼の姿をさせて疫病を表し、殿上人が桃弓に葦あしの矢をつがえ、鬼を射て追いかい、疫病避けとした行事であった。

白鳥庫吉は、「其の儀式の方法を見る時は、確かに中国より採用せられたるものにして、本邦固有のものに非ざること明かなり。追儼の儀式は『礼記』、『周礼』に明記せらる。桃が鬼を祓う magical force を有すという中国の思想に基きて此の儀式の起りたること疑ひなし」と述べている。

追儼は平安時代以後はほとんど廃れてしまったが、江戸時代になって、民間行事として、節分（すなわち立春の前日）に豆を投げて鬼の目を打ち、それを追い払う行事が生れた。それは追儼を受け継いだものであった。

白鳥は上の文に続けて、なぜ「桃が避鬼の力を有するかは……容易に解釈しえず。非常なる難問題なり」と述べている。これは碩学にとっても難問であったが、しばらく古代の桃観念にできるだけアプローチしてみよう。

2. 桃 — 不老不死伝説

(1) 桃の原産地は、中国の西域附近とされている。「桃の原産地は、中国およびペルシャ辺であろうというのが定説である。桃が人間に発見されたのは、およそ二五〇〇年前のことであろうと推定されている」。

(2) 桃が発見され、中国に伝わったのが二五〇〇年ぐらい前だとすると、『詩経』で「桃の夭夭たる 有蕢たるその実 この子ここに帰がば 其の家室に宜しからん」と歌われたのは、その頃であり、中国でもたいへん珍しい頃だったであろう。この詩歌は、貴重な桃を提示するとともに、桃が女性の象徴であつたことを示している。

(3) 古代中国には、桃の神様である西王母の伝説がある。西王母は西域（または崑崙山脈）に住む絶世の美女で、桃を食べて、不老不死になったと伝えられている。

(4) 桃は、特殊的には、西王母のようなグレートマザーの表現であり、一般的には、女性のシンボルであつたといえる。桃の節句が女子の祭とされたのも、それと関係があるだろう。ここで万葉の「春の苑 紅にほふ桃の花 下照る道に出で立つ乙女」の歌も思い出される。

桃を女性の象徴とすれば、桃太郎が桃から出てくるというのは、まさしく出産を表現するものであつた。そして桃の magical force の根源もそこにあると考えられる。すなわち桃の形は女性をなぞらえたものであり、桃には生を産みだす女性の神秘の力が込められていると考えられたと、思惟されるのである。

(5) 仏教では西方に極楽浄土があるというが、それは古代中国では、西王母の住む不老不死の国と混同されたようである。『西遊記』の初めに、「悟空）天宮を大いに騒がす」（大鬧天宮）という話がある。東海の花果山の石から生れた孫悟空は、海底に住む竜王から如意棒を奪つたために、天宮に呼びつけられる。悟空が行つた天宮は、西方の浄土、すなわち西王母の国であつた。孫悟空はそこで庭園（幡桃園）の番人にされる。そこに三千年に一度実を結ぶ桃の樹がある。「絶対食べるな」といわれていたが、悟空はその禁断の実を、樹に登ってむしゃむしゃ食つてしまう。それを食べると不老不死となるのだった。

「孫悟空が天界で大暴れするきつかけの一つは、管理人に任命されたばかりの幡桃園において、桃をしこたま食べてしまったことである。幡桃園の主は、いわずと知れた西王母である」。

天国の神様たちが驚き、軍勢を差し向けるが、それと戦って悟空は大暴れする。遂に悟空は捕えられるが、すでに不老不死の体になっているから、平然としている。神々も手を焼いて、かれは天国から追放され、再び地上に帰ってくる。

ここでも桃は不老不死の力をもつ木の実として描かれている。

(6) 「非時の香の木の実」といえば、日本では、田島間守の伝説で有名な橘（ないしみかん）であるが、中国では、永生をうる桃をさす。「桃はあの神話的な永世の果実、非時の香の木の実であり、中国の神話・宗教・呪術・民話・物語の時間表象において、古くから女王の地位を保持しつづけてきた。それは果実だけでなく、幹や枝やそれらの灰にさえ、顕著な呪力——悪魔払いの浄化力を有している」。

3. 桃と鬼についての一考察

(1) 生と死の対比

水が豊かで、果物の多い日本とは異なり、水の乏しい中国では、果物が少ない。例えばリンゴも、ふつくらして肉の多く、デリシャスな日本のものと異なり、中国のリンゴは硬くて甘味が少ない。例外的に桃だけは日本のものと同様おいしかった。古来桃は（その美味により）、王侯貴族ないし仙人の食べ物とされてきた。それが誇張されて、桃は、不老不死、永遠の生をもたらすものとされたのであろう。ここでは、桃を生象徴とみなすことができる。

思うに、古代の鬼は死者ないし死後の霊の形象であった。それは死の象徴であった。桃と鬼とは、生と死の対比を意味するものであった。

(2) 冬から春への移行

陶淵明の『桃花源記』にみられるように、古来中国では桃に対する思い入れが深かったと思われる。日本人が桜の花を見て春の到来を感じるように、古代の中国人は桃の花の咲くのを見て、春の到来を感じたようである。

桃と鬼は、生と死の対比を意味するものであるが、それは季節の巡回（特に冬から春への推移）と結びつけて捉えられていたと考えられる。それは桃が春の産物であるということだけでなく、鬼払いの催しが大晦日ないし節分に行われたことに示されている。旧暦では大晦日と節分との間に多少数日間のずれがあるにせよ、大晦日から正月へ、また節分から立春へとというのは、広義にはどちらも冬から春への移行を示すものであった。

草木の枯れ果てる冬は、死の季節であった。家の建付けや暖房が不備であった古代には、今日よりずっと冬が厳しかったであろう。それは老人などが多く死亡する時期すなわち鬼が活躍する時期であった。そして春は草木が萌えいずる再生の季節であった。とりわけ古代中国では、桃の花を見、稀少であった桃の実を食するとき、春の到来を感じ、無事に春を迎えた喜びをかみしめたであろう。

桃が鬼を退けるという信仰は、そのような春を待ちわびる心、そして春の到来を喜ぶ心から発したと考えられる。桃を見て、冬の去ったことを感じる心が、桃が冬、および鬼を斥けるという信仰に発展・転化したものと考えられるのである。

二、卵生説話と「桃から生れた」桃太郎

(1) 世界各地にヒーローが卵から生れたという卵生説話がある。とくに朝鮮の建国神話には、卵生説話が多い。

高句麗を建国した朱蒙や、弁韓の六つの伽羅国の建国者となった首露などに卵生説話がある。

辰韓では、楊山の麓の井戸に、天から「異気、電光の如く地に垂る。一の白馬の跪拝の状あり。此を検するに一紫卵あり。馬、人を見、長く嘶いて天に上る。其の卵を剖き、童男を得^て」。その子は赫居世と名づけられた。赫居世は辰韓六部を統合して、新羅の建国者となったという。

また『三国遺事』によれば、「倭の東北一千里に」龍城国（『三国史記』では多婆那^{たなば}国）があった。その王妃に久しく子がなく、「七年後一大卵を産む」。国王は不吉として、その卵を大きな箱に入れて海に流した。それが辰韓の阿珍浦^{あちんぼ}に流れ着き、

老婆に拾われて端正な男子となった。その子は、のち王女を娶り、新羅第四代脱解王となったという。

(2)「桃から生れた」というのは、卵生説話の変形であり、特別の子が生れたということとを告げるものである。

「桃から生れた桃太郎」は、桃太郎が神与の力をもつ、特別の子として出生したことを二重の意味で示すものである。一つには、桃に永生不死の力がありまた鬼を斥ける呪力があるという中国の伝説を受けている。それは「桃から生れた桃太郎」が、桃の精として生れたこと、不老不死をいみする桃の人化であることを表現している。同時にまたそれは卵生説話の変形として、「桃から生れた」桃太郎の話が構成されたことを示している。それは桃太郎が英雄的事業を成し遂げることを予告するものである。

三、桃が川から流れてきたことの意味

私たちの子供時代は、娯楽が限られていた。その代表的なものは、紙芝居であり、そこでのヒーローは「黄金バット」であった。その後、「月光仮面」や「ウルトラマン」や「スーパーマン」など、種々なヒーロー（ないし正義の味方）が現れた。

時代をさかのぼると、正義の味方といえば桃太郎——という時代があった。桃太郎の話には、ヒーローの出現を予告する伏線がしかれている。それは二つの異常出生譚である。一つは「桃から生れた」桃太郎ということである（それについてはすでに論じてきた）。もう一つは、「(桃太郎の)桃が川から流れてきた」ということである。ここでは「桃が川から流れてきた」ことの意味を考えてみることにしよう。

(1)「桃が川から流れてきた」ことは、子どもが川で流されてきたというのと同じ重みを持っている。古代には、しばしば子どもが実際に川に捨てられて流された。それは、姥捨て（すなわち老人が山に捨てられるの）と同様、ひそかな殺害（間引き）をいみしていた。川や山は、墓所をいみしたのである。川で水死した子どもの亡霊が、転じて河童や

川の神（水神）となる。そして通りがかつた人を同じ目にあわせる、すなわち川に引きずりこみ、溺死させる、と恐れられた。

(2) 川に流された子どものうち、例外的に拾われて助かる者もあつた。川に流され、偶然拾われて育てられたものは、やがて英雄・偉人となる。そのような物語が、世界各地にある。例えば、イスラエルの子モーセの話が有名である。古代エジプトで嬰兒殺しの行われたとき、生れたばかりのモーセは、箱に入れられてナイル川に流されるが、エジプトの王女に拾われて育てられる。のちエジプトの王（ファラオ）と闘い、エジプトで奴隷化されていたイスラエルの民を引き連れ、紅海を渡り、故国イスラエルに帰る。モーセはシナイ山で神より「十戒」を授かり、その後長く精神的指導者と仰がれた（旧約聖書の「出エジプト記」）。

(3) ローマの伝説では、紀元前四世紀、王女シルヴィアは未婚であつたが、マルス神の求愛を受け入れ、ロムルスとレムスの双子を生んだ。その双子は王によつてテヴェレ川に流されたが、岸について狼に育てられた。のちロムルスはテヴェレ川のほとりに新しい町を作り、自分の名に因んでローマと命名した。そこでローマの人たちはロムルスを「建国の父」と呼ぶようになった（私はローマ市で、狼の乳を飲む双子の銅像をみた）。

(4) 吐蕃（チベットの古名）にも、次のような伝説がある。紀元前三世紀、インドの王に、指に蛙のような水かきのある子が生れた。王は奇形児として嫌がり、その子を箱に詰めて、インダス川に流した。下流の羊飼いがそれを拾い、自分の子として育てた。その子が少年になると、急に家を出て、ネパールからヒマラヤ山を越え、チベットまでやつてきた。その少年はニヤティ・ツエンポ（人々の「肩にかつがれた王」の意）と呼ばれ、吐蕃王朝の初代の王となつた、と伝えられる。⁽⁸⁾

(5) 桃太郎の話では、捨てられる部分が省略されて、おばあさんに拾われるところから始まる。それは、子供が一度川に捨てられた後、拾われて偉大な英雄になるといふ物語を背景にして（隠れた前提として）、捉えられるべき物語であ

ると考えられる。それによつて、桃太郎はこの世のふつうの人でなく、特殊な人間であること、特別な星の下に生れた子であることが重ねて示されているのである。

四、寝太郎型桃太郎

桃太郎の異常出生譚は広く知られている。しかしその後の桃太郎がどのような人間であつたかについては、小波版ではほとんど語られていない。しかし民話のなかには、それについて語っているものもある。

日本の各地に桃太郎の伝説があるが、少しづつその話が異なっている。その中で、どれが原型であるかが従来論じられてきた。有力とみられているのは、岡山に伝わるものである。

松谷みよ子の『ももたろう』は、岡山県の民話をもとにしたものであるが、ものぐさ太郎か三年寝太郎のような桃太郎となつている。

「だいぶ大きくなつたので、村の人が、

『ももたろうさん、山へ柴刈りに行きましよう』

そういつてさそうけど、ももたろうは

『かまがないから 行かれない』

『わらじがないから 行かれない』

そんなことばかりいつて、行きません。

ようやく山へ行つたら、仕事はしないで、ぐうぐう寝てばかり……

みんなあきれてねえ」。

ものぐさ型（ないし寝太郎型）桃太郎は中国・四国地方に広く分布している。

桃太郎は天賦の才能に恵まれていただけに、よけいに人並みの平凡な仕事をする気になれなかつたのであろう。だから世間的にみれば、どうしようもない怠け者となつてしまった。

芥川龍之介の『桃太郎』パロディであるが、皮肉がきいており、かくれた真実をえぐっている。

「桃太郎は鬼が島の征伐を思い立った。思い立った訳はなぜかといふと、彼はお爺さんやお婆さんのように、山だの川だの畑だのへ仕事に出るのがいやだったせいである」。

ふつうの労働者・農民であれば、遠くへ遠征し、鬼退治しようなどということは考えないであらう。桃太郎がそのようなふつうの人でなく、「仕事に出るのがいやだった」というのは確かであらう。

戦前大陸へ出て行つた「一旗組」には、労働から遊離し、食い詰めた者が多かつた。桃太郎も労働を忌避した結果、そのような「一旗組」と同じ心理になつたと考えられる。いわば追いつめられて、遠くへ出かけ「一旗あげるか」という心理になる——それが桃太郎が鬼退治に出かける内的動機であつたといえよう。

第2節 供揃えと黍団子

一、お供の犬・猿・雉

1. 十二支による説明

(1) 桃太郎のお供として、なぜ犬・猿・雉が選ばれたか。それに対する一つの答えは、十二支で説明するものである。すなわち鬼門と反対方向にあるものとして、犬・猿・雉(鳥)が選ばれた、というのである。

十二支を方角にあてはめると、鬼門は丑寅で、東北にあたる。猿(申)は西南西、鳥(酉)は西、犬(戌)は西北西となる。だから鬼門と反対方向の動物たちであるというが、鬼門とびつたり反対方角にならず、角度がずれている。

「鬼が島を鬼門として、申・酉・戌を以つて之に対せしめたのだという方位説の如きは、余りに穿鑿に過ぎていはいないか。予は之に賛しない」と野村八良のいうように、これは穿ちすぎの論だと思われる。

(2) お供に犬、猿、雉が選ばれたのは、おそらく単純な理由から、すなわちそれらが古来日本人になじみ深い動物であったからであろう。

犬・猿については、「犬も歩けば棒に当る」「猿も木から落ちる」等の諺もある。

雉についていえば、日本固有の鳥であり、一九四七年日本鳥学界は「国鳥」に指定した。「雉を一種神聖な鳥と考えた⁽¹⁰⁾」のである（「雉も鳴かずば撃たれはしまい」の諺もある）。これらが古来日本人になじみ深い動物であることについては多言を要しないであろう。

(3) 民話の動物婚姻譚には、蛙と庄屋の娘との結婚、蛇女房、猿婿⁽¹¹⁾などが表れる。鶴女房が貧家の美しい、よく働く娘を表しているように、これら動物たちは、下層民を表現したものである。

桃太郎のお供である犬・猿・雉も、下層民を童話的に、動物として表現したものといえよう。

2. 『西遊記』との比較

桃太郎のお供の犬、猿、雉は、しばしば『西遊記』に登場する三匹の動物と比較される。しかし桃太郎のお供と玄奘三蔵のお供は質的に異なる。

孫悟空が古代インドの『ラーマーヤナ』に登場する猿神の影響を受けていることは、すでに指摘されている⁽¹²⁾。唐代に孫悟空の原型である『白猿伝』が作られたが、当時中国のかなり多くの地域では、猿神を拜む風習が盛んであった。孫悟空は猿神をさらに大規模化して、雲（筋斗雲）に乗り、如意棒を振り、毛を吹いて何匹も身代わりを作り出すといった超能力者になっている。たゞし、喧嘩^{けんか}早くするときどき失敗する。

猪八戒 — 日本では猪^{いのしし}、中国では豚。古代中国では、家畜を犠牲に捧げ、豊作を祈る祭があった（北京市にある天壇は、

かつて皇帝が豊作を祈願し、大量の豚・牛・羊等を犠牲にして、燔祭を行ったところである。そこでは昔の燔祭の儀式の順序を詳しく書いて展示している。

八戒が手にする武器「釘鉞」は元来は農具であった。豚は豊作の象徴であり、もともと八戒は農業の神であったとみられる。しかしスケベティックで、美女の形で現れる妖怪にすぐだまされるという弱点がある。

沙悟浄 — 流沙河にいた河童。沙悟浄はその河を通る僧をとって食っていたという。もとは邪神であった。¹²⁾

孫悟空、八戒、沙悟浄は、本来は民間の神々（ないし邪神）であった。邪神であったとしても、「悪に強いものは善にも強い」の諺どおり、三蔵法師（玄奘）、ひいては仏教に奉仕するようになり、善なる使徒に転化した。彼らは旅行の先ざきで種々な妖怪変化（金角・銀角など）と戦い、降伏させ、道を切り開いていくのである。孫悟空、八戒、沙悟浄と、妖怪変化との戦いは、神々の戦い — 善なる神と悪い神との戦いを示すものであった。

孫悟空等が大活躍し、個性も明確であるのに対して、桃太郎に出てくる三匹の動物は、登場人物（キャラクタ）としては個性がないし、名前さえないのである。

『西遊記』のお供は超能力を持った神々の化身として登場している。それに対し、桃太郎の犬、猿、雉は超能力を持つわけではない。それらは名もない民衆の代理として登場している。それらと鬼との戦いは、世俗的な闘争（財宝の争奪。地域によっては、桃太郎と鬼が、女の争奪をする伝説もある）を童話化またはカリカチュア化して画いたものなのである。

二、きび団子

桃太郎とお供を結ぶものとして黍団子がある。

(1) きび団子は吉備を兼ねる。それが「桃太郎」が岡山の物語であることの一つの根拠とされている。

(2) 旅立ちに際し、桃太郎はきび団子を作ってほしいと注文する。きび団子というのは、ささやかな注文である。「少年

よ、大志を抱け」というが、大志を持つのは、通常裕福な家の子ではなく、貧しい下層の子どもである。それが黍団子に表現されている。米でなく、黍。キビは戦前でも粗食料といわれた（いまなら多分まずくて食べられない¹³）。黍団子は、米を作りながら、年貢に取られ、ふだんは米が食べられなかった下層農民の生活を表現している。

(3) 犬、猿、雉は桃太郎から黍団子一つもらってお供になる。お供は、飢餓に苦しむ下層民であることが示されている。桃太郎も同様である（古い童話では、犬や猿や雉が「一つ下さい。お供します」という。それに対して桃太郎は「一つはいやだ。半分やろう」という。黍団子さえ、下層民にとつては貴重であったことがわかる）。それは桃太郎が、下層民の中から、味方の軍勢を募り、集めたことをいみしているのである。

第3節 鬼

桃太郎の話は、「正義は勝つ」ということを教えるお伽噺であった。しかし桃太郎はなぜ正義なのか——ということ、この物語は説明していない。「鬼は悪者である」という、既成の前提概念があり、その反対物として、「桃太郎は正義である」と想定されているのである。

では、鬼はなぜ悪なのか、ということも、解っているようで解りにくい。ここでしばらく、「鬼観念」について検討してみることしよう。

一、鬼観念

1. 鬼の意義と作用

(1) 原義。「鬼」の字と概念は中国から伝来した。古代中国では、死後の霊を指して「鬼」といった。日本でも、死ぬと

「鬼籍に入る」といった。

「鬼」は、中国では死者またはその魂ないし亡霊をいみしたが、中国の鬼は、善霊（尊崇すべき祖先霊等）も悪霊も含んでいた。日本の鬼は祖先霊等の善霊を含まず、悪霊だけをいみした。殺された人や恨みを抱いて死んだ人が、死にきれずにさ迷い、鬼（悪霊）になると考えられた。

(2) 音。「おに」のことばは、「穩おん」からきている。『倭名類聚抄』の「鬼」（於爾）の項に「物に隠れて形を顕はすことを欲せず、故に俗に呼びて穩と曰う也」とある。ふだんは（地下に）隠れていることが、鬼の特徴であった。

「鬼」の音はキであるが、古く（万葉時代）は、モノと読んだ。そこからモノノケということばが生れた。それは「鬼氣」で、怒った霊または怨霊おんりようであり、悪鬼をいみした。（のち「物の怪」と書くようになった）。

(3) 鬼の作用。鬼ないしモノノケの作用は、人間に祟りたた、害をなすことである。それは、ある人に憑き狂乱させ、ときには死の世界に引きずり込む。または広く疫病を発生させ、多くの人を衰弱させ、死にいたらせる。⁽¹⁴⁾

鬼は死を意味し、死に至る疫病の原因と考えられたため、鬼は怖いもの、そして悪の象徴とみなされたのである。

二、鬼の形

1. 伝来した鬼の形

(1) 「今鬼の形を描くに、頭に牛角をいただき、腰に虎皮をまとふ。是牛と虎との二つを合せてこの形をなせり」⁽¹⁵⁾。それが中国から伝来した鬼の姿であった。

それは角のある牛頭を特徴とした。中国の農業と医学（漢方薬）の神である神農は、牛頭であったと伝えられる。「湯島聖堂に平安中期（九八二年）東大寺の僧が中国（宋）から持ち帰った神農像（木像）があるが、その頭には二本の角が生えている」⁽¹⁶⁾。それは未開民族によくあるトーテム信仰を表すものであった。アイヌが熊を祖先の生れ変りとみ

て尊崇し、自分たちも死後は熊の世界に入ると考えていたように、古代中国の農民は、牛と自分たちを一体化して捉えていたのである。彼らにとって、牛頭は祖先神の姿であり、また自分たちの死後の姿であった。

牛頭はもともとは、農業および祖先崇拜と結びついた尊ぶべき概念であった。それが人は死後鬼となることから、後世牛頭は鬼の姿に用いられるようになったのである。

(2) 仏教では、死後地獄で閻魔王の配下に赤鬼、青鬼がいて、死者を残酷に痛めつけると説くようになった(昔の監獄を模したものであろう)。それらの鬼は、牛頭・虎皮であった。

鬼が地獄の使者となつたことから、牛頭の鬼は怖いというイメージがつきまとうこととなつた。

(3) 牛(丑)と虎(寅)との二つを合せて鬼としたことから、丑寅(東北)の方角を「鬼門」(鬼が住み、やってくる方向)といつて忌む慣習が生じた。鬼門の考えは平安時代にははつきりと表れていた。それは建築上に重大な影響を与えた。

2. 日本的な鬼の形。

伝来した鬼の形は動物的で、日本人にはしっくりしなかつたのであろう。平安時代頃からそれとは別に、日本的で、かつ世にも恐ろしい鬼の形が語られるようになった。

『今昔物語集』巻二十七には、鬼が人を食う話が多く集められている。その第十三話は、近江国の安義の橋の鬼の話である。その橋に、悩ましく、切なげな目つきをした女が立っていた。男が馬に乗って通り過ぎようとすると、猛烈な勢いで追いかけてきた。男がふりかえって見ると、「面八朱ノ色ニテ円座ノ如ク広クシテ、目ハ一ツ有り。長八九尺許ニテ手ノ指三ツ有り。爪ハ五寸許ニテ刀ノ様也。色ハ緑青ノ色ニテ目ハ琥珀ノ様也。頭ノ髪ハ蓬ノ如ク乱レテ見ルニ心肝惑ヒ、恐ロシキ事限り無シ」。男は馬を走らせ、その場を逃れたが、のちにかみ殺されてしまうのである。

このように美女が鬼に変化するの(中国の物語によくあるが)、巧みな話の運びになっている。そして本性を現した鬼

は、聞くだに恐ろしい形相ぎようそうになっているのである。

三、事例——大江山の鬼

ほとんど全国各地に鬼の伝説があるが、ここではその一例として大江山の鬼をとりあげる。大江山の鬼の酒吞童子しゅてんどうじという名前は、源頼光とその家来の四天王（渡辺綱、坂田金時等）が大江山に乗り込んで鬼退治したという伝説とともに、広く知られている。

宮田登が京都府の伝説として書いている「大江山の鬼」は、女をさらい、「女をかわいがったあげく、その血をしぼって飲み、肉をそいで食べる」と、サディスティックである。本当に京都や大江山周辺では、このようなグロテスクな鬼として語られているのだろうか。

なぜ「大江山の鬼」の伝説が生じたかは、考察に値する。それには次のようなことが考えられる。

(1) 古代には、天狗と鬼が混同されていた。さらに山伏もその仲間とみられていた。京都の西北、愛宕山と大江山は修験道の山伏たちの霊場であった。多くの山伏が大江山に来たことが、大江山に鬼や天狗がいるという噂が立つ一つの原因となった。

(2) 平安時代末期、京都に疫病が流行した。京都につながるの四つの大道の山城国国境の四地点——逢坂、山崎、大江、和邇わにで、疫鬼退散のための「四境祭」が行われた。悪い風が吹く西北は特に不吉な所と考えられ、山陰道の通る大江山が最も重要な祭場となった。¹⁹⁾

以前から、(各地にあるように)大江山の鬼の小さな伝説はあったようである。大江山で大規模な鬼退散の儀式が行われたため、大江山の鬼伝説がふくれあがった。大江山の鬼に酒吞童子の名前がつけられ、頼光たちが山伏に変装してその要害にもぐりこむというストーリーが作られ、鬼退治の説話が仕上げられたのは、頼光の時代から三百余年ものち、十四世紀南北

朝時代であった。

かつては大江山に盗賊団が住みつき、それを鬼といったのだという解釈がなされたりした。しかし、大江山に盗賊団がいたということも、頼光たちが大江山に鬼退治に行ったということも、史実としては否定されている。

要するに、大江山の鬼は、(盗賊団というような) 物的根拠があつて作られた話ではなく、架空の、観念上の産物にすぎないのである。大江山で大掛かりな鬼退散の儀式を行ったことが、かえつて逆に「大江山の鬼」伝説を肥大化させ、有名にしてしまったのである。

四、鬼とされた人たち

(1) 古代の鬼は、ふつう物的根拠をもたない観念上の存在であつた。しかし後世、それが物的根拠をもつようになり、すなわちある人たちが「鬼」呼ばわりされるようになったとき、社会的に深刻な被害者を生み出した。

それは西洋の「魔女」伝説に相当するものである。中世から近世にかけて、西洋において多くの老婆が「魔女」とよばれ、囚われて焼き殺されたりした。根拠のない伝説が物理的猛威を振つたのである。

小松和彦は、こう述べている。「鬼には、説話や伝説、芸能、遊戯などで語られ、演じられる想像上の鬼と、周囲の人々から鬼またはその子孫とみなされている実在の鬼との二つの系統がある。このうち実在としての鬼というのは、反体制的な人々や、村落共同体の外部にいる人々、一部の宗教者などのことである」²⁰

想像上の鬼 —— 大江山の鬼、羅生門の鬼など。

現実の鬼 —— 私は、練馬区桜台の唐沢博物館で、慶応四年の「切支丹禁制」の高札を見た。また戦時中は「非国民」という言葉が流行した。禁制時代の切支丹や、戦時下の「非国民」は世間から鬼とみられ、迫害された。

(2) 国家からみて、反逆者やまつろわぬ民(化外の民)が鬼とされた。

巖谷版桃太郎はいう。「其の鬼、心邪よこしまにして、我皇神おほかみの皇化みおしえに従わず、却つて此の葦原あだの国に寇あだを為し、蒼生たみくさを取り食い、宝物を奪い取る、世にも憎き奴に御座ります」。

熊襲や蝦夷の歴史をみると、「皇化に従わ」ない者として鬼とされ、征伐の対象とされたのである。

(3) 異国民や異民族、とくに海外の民が鬼とされた(海を越えて鬼退治——となる)。

第4節 鬼が島

一、鬼が島はどこに

(1) 巖谷版桃太郎はおじいさんと次のような会話をする。

「シテそちは、何処どこへ行く気ぢや？」

「仔細しさいを申さねば御不審ごふしんはごもつとも。もこの日本の東北の方、海原遙かに隔てた所に、鬼の住む島が御座ります。私只今より出陣致し、彼奴まやつを一控ひとひしぎに取り押え、貯え置ける宝の数々、残らず奪い取りて立ち帰る所存」。

巖谷桃太郎は、「東北」の方に鬼が島があるという。それは鬼門が東北に当ることによるものであるが、現実的には、東北地方または北海道の、蝦夷の人たちをさすことになる。

平安時代初期、東北地方に遠征し、蝦夷えみしを平定した坂上田村麻呂が武士の鑑として尊崇された時代があつた。桃太郎は田村麻呂をモデルにしたものという解釈も成り立ちそうである。しかし東北の人たちは、自分たちの故郷が鬼が島扱いされることに、合点がいかないであろう。

(2) 岡山では吉備津彦を桃太郎のモデルとする。

『日本書紀』によれば、崇神天皇の皇子吉備津彦は、西道將軍となり、大和より出征して岡山地方を征服・平定した

(その後岡山は吉備と呼ばれるようになった)という。吉備津彦が桃太郎なら、岡山は鬼が島だったということになる。岡山人は、一方では桃太郎は桃の産地岡山に生れたという。岡山人のいうことを聞けば、岡山は桃太郎側か、鬼側か、わけがわからなくなる。

(3) 岡山の人から聞いたところでは、瀬戸内海に鬼が島があると幼い時に聞いたことがあるそうだ。(そこで調べてみると、高松市の沖合いにある女木島が「鬼が島」と呼ばれてきたとのこと。女木島の人たちは長年さぞかし肩身の狭い思いをしてきたことであろう)。

私の瀬戸内海の島のイメージは、新藤兼人監督の映画『裸の島』で形成された。それはサイレント映画に近いもので、黙々と働く夫婦を画く。水が不便で、遠くから桶に水を汲み、天秤棒で担いで、山を登り、段々畑の作物に水をかける。乙羽信子が演じた妻が、耐え切れなくなつて、めっちゃめっちゃに作物を引き抜いていく姿に共感できた。無理ないと思つた。島人は、貧しく、まさしくワーキング・プア。それは最下層民の必死に生きる姿であつた。とても鬼が島とは思えない。

(4) 九州では、薩摩の南の硫黄島が「鬼界が島」と呼ばれた。『平家物語』では、鹿が谷事件によつてここに俊寛たちが島流しにされた(能『俊寛』参照)。ほとんど草木も生えない、荒涼とした島。これらは桃太郎が宝を車に積んで帰つた「宝の島」というイメージではない。

二、鬼が島かつ宝の島とは

(1) 鬼が島は、日本人にとって未知の島で、恐ろしい鬼の住む島であると同時に、それは桃太郎が金銀・財宝をぶんどってきた宝の島であつた。そのような宝の島とみなされてきた所がある。

『日本書紀』神代卷第一に「一書に曰く、スサノオノミコトの曰く、『韓くにの島には、これ金(こがね)銀(しろがね)』

有り』、また同書卷第八では、檀日の宮にいる神功皇后に神託があり、「宝ある国、たとえば乙女のまよびきの如くにして（海上より見た形容）、津に向へる国あり。眼かがやく金・銀・彩色（うるはしきいろ）、多にその国にあり。これを栲衾新羅の国という」と告げる。それが神功皇后の新羅征伐（ないし三韓征伐）の発端となる。

(2) 神功伝説は現在歴史学界では架空のものとみられている。そうであったにしても、日本が韓国に対して涎を垂らし、それを征服・支配しようと考えてきたことは争われない。のちの倭寇や豊臣秀吉の朝鮮出兵、明治以後の韓国併合（一九一〇年）とその植民地化は、古代以来の思想を実践したものであった。（幕末から明治にかけて、吉田松陰、本多利明、西郷隆盛、福沢諭吉等、革新と文明開化の先駆者が輩出した。彼らはまた近隣諸国の征服や「征韓論」「脱亜論」などを主張した人たちであった）。

歴史的に見て、日本が鬼が島かつ宝の島とみてきたのは、端的には、韓国（朝鮮）のことにほかならないであろう。

第5節 桃太郎像の変容

一、侵略型桃太郎

(1) 白鳥庫吉は次のような注目すべき発言をしている。

「鬼の住家は元来恐ろしい貧しい厭な所と考へられたのに、桃太郎の童話に於いては鬼ヶ島が宝の国となっているのは、この童話の作られた時代の影響とみななければならぬ。然らばその時代は何時頃かというに、それは我が国で海外思想の最も盛んであった足利時代と答えねばなるまい。この時代に於いては、倭寇が朝鮮や中国の沿岸を荒らして盛んにその財物を本国に持ち帰った」。

海外から宝を持ち帰る桃太郎を、倭寇の反映とみている。桃太郎を、朝鮮・中国に侵攻し、略奪した倭寇の表現とみた白

鳥の見解は、(日本の一部から反発を招きそうであるが)、卓見であると思われる。(鬼が島かつ宝の島を、朝鮮から中国まで広げることも可能である)。

(2) ここで芥川竜之介のパロディ『桃太郎』をみてみよう。

平和的に暮していた鬼が島に、突如桃太郎たちが攻め込んだ。鬼たちは「右往左往に逃げ惑った。『鬼といふ鬼は見つけ次第、一匹残らず殺してしまへ』、犬・猿・雉は、鬼もその子も殺し、「鬼の娘を絞め殺す前に、必ず陵辱を恣(ほしいまま)にした」。鬼の酋長は降参して、「私たちはあなた様にどういふ無礼をいたしましたのやら、とんと合点が参りません。ついではその無礼の次第をお明かし下さるわけには参りますまいか」と聞く。「桃太郎は悠然と頷いた。『日本一の桃太郎は、犬猿雉の三匹の忠義者を召し抱えた故、鬼が島へ征伐に来たのだ』⁽²³⁾。これは答になつていないが、相手に非があつてもなくても「征伐」するというのは、まさに侵略者の論理である。

芥川の『桃太郎』では、「鬼」は平和的な住民、桃太郎はそれを蹂躪した侵略者とされている。

芥川龍之介がこの『桃太郎』を書いた背景として、一九二一年彼が中国を訪れたとき、章炳麟(太炎)からいわれた言葉がある。

「僕は上海のフランス町に章太炎先生を訪問した時、剥製の鱗(うた)をぶら下げた書齋に、先生と日支の関係を論じた。その時先生の言った言葉は未だに僕の耳に鳴り渡っている。――『予の最も嫌悪する日本人は、鬼が島を征伐した桃太郎である。桃太郎を愛する日本国民にも多少の反感を抱かざるを得ない』⁽²⁴⁾。

関口安義は次のように指摘している。

「章炳麟の桃太郎批判には、侵略者桃太郎(日本人)というはつきりした指摘がある。日本帝国主義、特に当時の日本政府の植民政策が糾弾されているのである」⁽²⁵⁾。

日本人にとつての英雄桃太郎も、植民地の人民から見れば侵略の象徴でしかなかったのである。

(芥川の死後) 満州事変(一九三一年)を契機に、日本は中国への侵略戦争を拡大していった。芥川の画いた「桃太郎」は、お話でなく、現実のものになった。

(3) 蒋介石は、中国に侵入した日本軍を「倭寇」と呼んでいたが、まさしくそれは現代の倭寇であった。

戦争中、多くの国民は統制され、耐乏生活を強いられていた。しかし他方では、軍需を受けて、成金となった者が続出した。清沢冽は『暗黒日記』で、「今回の戦争で儲けたのは右翼団」として、児玉誉士夫等をあげている。

陸軍下請けの特務機関を作って活動した右翼の人たちに、児玉機関の児玉誉士夫、里見機関の里見甫、岩田機関の岩田幸雄らや、彼らの黒幕(親分格) 笹川良一等がいた。彼らは上海を根拠地として、スパイ活動や汪精衛傀儡政権樹立等の工作とともに、貴金属、武器、軍需物資の収集・調達、さらには麻薬(アヘン等)の密売に従事し、莫大な資金と財宝を得た。

「犬が前引くエンヤラヤ」の掛け声も勇ましく、桃太郎は宝を積んだ車を引いて帰ったという。現代の桃太郎たちは中国で略奪したり、収集・蓄積した財宝を飛行機で日本に運んだ。(笹川は十数機の飛行機を所有していた)。敗戦時、児玉・岩田・笹川らは、上海で「飛行機二機に、金の延べ棒やダイヤ、翡翠、ラジウムなどを積み込んだ。あまりの重さに、飛び立つ前の迂回時に、車輪が折れた。だが、飛び立って、島根県に着いた²⁶」。その分け前をめぐって、児玉と笹川は争ったという。

戦後、児玉は莫大な資金をもとに、保守政治家の黒幕となった。保守合同も、彼がフィクサ(仕掛け人兼資金提供者)となって実現したことは、もはや公然の秘密となっている(猪野健治『現代の黒幕』(創魂出版)の第三章は「児玉資金で生れた自民党」という題で、詳しくそれについて述べている)。

笹川は戦後全国モーターボート競走会および船舶振興会を興し、テレビのコマーシャルに自ら出演して「人類はみな兄弟」といつていた。彼らは日本と中国の人民の多大の膏血と犠牲の上に、巨大な富を築いたが、それがこのようにいうのは、盗人が人類愛を説くのよりひどいマンガではないだろうか。

(4) 桃太郎の物語が確立したのは、近代になってからであった。

桃太郎の征服物語は、日本が超国家主義（ウルトラ・ナショナリズム）と軍国主義（ミリタリズム）に徹し、他国への侵略と略奪を是としていた時代に最ももてはやされた。桃太郎は、日本軍国主義、日本帝国主義のシンボルと化してしまった。⁽²⁷⁾

（以上で最初に掲げた三つの設問について説明した。しかしここで終るのは多くの桃太郎ファンに対して忍びないので、蛇足ながら次項をつけ加える）。

二、新しい桃太郎像を求めて

1. 平和的な桃太郎

(1) 芥川の「桃太郎」は、桃太郎は侵略者ではないか、平和的住民の破壊者ではないかと問いかけている。それに対して、昭和の初期、従来の桃太郎を書きかえ、新しい桃太郎像を打ち出そうとするいくつかの試みがなされた。それには二つの傾向があつたといえる。

その一つは、やさしい鬼と平和的な桃太郎の提起である。その先鞭をつけたのは浜田広介で、『泣いた赤鬼』という、実に人間的な、やさしい鬼を画いている。

彼はまた童話『ももたろうの足のあと』を書いた。それは鬼が島に着いた桃太郎の足跡に焦点をあてている。

「ももたろう、おとももの犬とさるときじ、ならんでいくと足あとが、すなじの上につきましました。犬、さる、きじの足のあと、見ればだれにもわかりました。ももたろうは、ちからもち、それでしたから、足あとがたいらなすなじにはつきりといっていました。だれがそれを見たのでしょうか。すなじの上の足あとは、そういつまでも残っていません。なみがさらさらよせてきて、すなをあらうと、足あととはしぜんにきえてしまいました⁽²⁸⁾」。

鬼は現れず、海辺の足跡という、一つの美的世界を画いたものである。

(2) 新美南吉の童謡「鬼が島」(一九三〇)では、鬼と桃太郎は一つの仲間になってしまう。

鬼のおむかい 船着き場

帆船は港に 入りました

鬼が居ります 鬼が島

島の浜辺で きびだんご

みんなでたんと 食べました

食べて踊って 日が暮れた

桃太郎、犬、猿、雉の乗った船を、鬼たちが出迎える。鬼と桃太郎は戦うことなく、平和的に食べて踊るのである。

これも一つの行き方とは思うが、私は桃太郎の物語は戦いが本質的契機であるかぎり、もう一つの桃太郎——闘う桃太郎の方が有力だと考える。

2. 闘う桃太郎

(1) 闘うといっても、従来の侵略型、そして財宝を奪って帰る略奪型の桃太郎ではいけない。社会正義のために闘う桃太郎でなければならぬ。そのように考え、新しい桃太郎像を提起した例が、本庄陸男『鬼征伐の桃太郎』にみられる。それは桃太郎を地主と闘う闘士としたものである。

「苦心惨憺して作ったお米は、小作米、小作米といって、地主がどんどん持って行ってしまおう」。

黍団子を丸めながら、おばあさんは言う。「なう桃太郎や、米を作りながら、黍ばかり食はなならんやうな、こんな世の中が又とあらうか」。

小作米を取り立てる地主は「鬼」と呼ばれる。桃太郎は、猿吉、犬次郎、雉介等の仲間を集め、地主権左をやっつけに行く。本庄陸男によれば、鬼退治とは、なんと地主征伐のことであった。

(2) これは最近つくられたパロディのごとくみえるが、昔話の中に、これに類するものがある。例えば「伊予のボボ太郎」である（ももたろうをボボたろうという地方もある）。

「ある所に父と母が住んでいた。父は山へ行つて小間木を取つて来、母は川へ出て洗濯をして、どうやらシャリ（飯）食つていた。なんぼ稼いでも、大仁者（長者）が来て持つてえぐ（いく）ので、ええ暮しができなかつた」。

母は川で洗濯しながら子供を生み、「ボボ太郎」という名前をつけた。ボボ太郎は大きくなつて、百姓たちを連れて、「わい等がもんを奪り返せ」

「わい等が宝は 大仁者が手に……」

と、歌いながら進んだ。∴大仁者は一たまりもなく、みんなに殺された²⁹」

改革の闘士が登場するこのような昔話は珍しい。

本庄陸男の試作と「伊予のボボ太郎」は参考になるが、まだ問題がある。

(ア) 地主との闘いは戦前は切実な問題であつたが、戦後農地解放を経て、小作争議は主要な問題ではなくなつた。

(イ) 本庄等の作品はイデオロギーをストレートに物語に持ち込み、生硬な感がある。もつと文学的に肉付け、芸術的香りをもたせる必要がある。

しかしその方向は正しいであろう（それはイメージにおいて、黒沢明の『七人の侍』や足尾鉍毒事件の田中正造につながる）。

(3) 桃太郎は闘いの人であるが、従来の平和な島に殴りこむ侵略型桃太郎は、結局侵略戦争美化とならざるをえなかつた。

新しい桃太郎像は、過去の桃太郎書きかえの努力を汲んで、その上に提起されるだろう。ここでは大まかな輪郭しか示すことができないが、新しい桃太郎は、弱者の立場に立ち、社会的不正糾弾のために奮闘する（田中正造型の）闘士として蘇生することができるであろう。その具体的な展開はなおしばらく待たなければならぬが、私はやがて新

しい小波が現れ、桃太郎の話をリライトする日が来るものと考えている。

注

- (1) 柳田國男『桃太郎の誕生』一九七〇、角川書店。
- (2) 野村純一『新・桃太郎の誕生』(二〇〇〇、吉川弘文館)に、花咲爺の話に転化する桃太郎の話が出ている。おばあさんが川で桃を拾って帰り、たらいに伏せておいた。たらいをあけると、桃が犬になっていた。「その犬がお爺を乗せて、山へ行つたがいね。ほしたら、『ここ掘れ、ワンワン』という犬がいたら、そこ掘つたら、金やら何じやら宝物がいつばい出てきたつて」。隣の爺にその犬が殺され、後は花咲爺の話になるのである。また横笛太郎「桃太郎」(『東京のむかし話』一九七五、日本標準、所収)は猿蟹合戦型の桃太郎である。桃太郎が鬼が島へ鬼退治に行くとき、栗や白や蜂やカニなどを連れて行く。鬼が留守のとき、その家に入り、隠れている。鬼が帰ってくると、「蜂が鬼の目をさす。『わっ』。…鬼は急いで水桶の中にとびこむと、ジャキツと、カニが鬼のしりをはさんだげな。『わっ』鬼は水桶からとびだして、とんぼ口のほうへかけていつて、…ひっくりかえつたところへ、上からおもいきり石臼が屋根からとびおりたげな。鬼は、ながーくなって死んでしまうた」。
- (3) 「桃太郎の話」、『白鳥庫吉全集』第二巻、一九七〇、岩波書店。
- (4) 『世界大百科事典』一九六七、平凡社。
- (5) 中野美代子『孫悟空の秘密』一九八四、福武書店。
- (6) 大室幹雄『囲碁の民話学』一九九五、せりか書房。
- (7) 『文科大学史誌叢書 三国遺事』巻一、東京大学蔵、一九〇四、吉川半七印刷発行。
- (8) チレチユジャ著、池上正治訳『チベット 歴史と文化』一九九九、東方書店。
D. スネルグロウヴ著、奥山直司訳『チベット文化史』一九九八、春秋社。
山口瑞鳳『チベット』下、一九八八、東大出版会。
- (9) 松谷みよ子『ももたろう』一九七〇、講談社。
徳島県三好郡に伝わる桃太郎も、それと同様である。
「よその子が来て山へ木をおろしに行くんじやと。
『桃太郎さん、山行かんでか』
というと、
『われは今日は鎌がないけん行かん』
というそうな。ほいでまた翌日になつて
『桃太郎さん、山行かんでか』
というと、
『われは今日は縄がないけん行かん』
というそうな。…」
- (10) 『世界大百科事典』第五卷(平凡社)の「雉」の項。
(山へ行つても)よその子はみんな木を取るのに、桃太郎は山で昼寝ばつかししとるそうな(野村(2)と同じ書)。
- (11) 入谷仙介『西遊記』の神話学』中公新書。

- (12) 中野美代子は「沙悟浄の姿が揚子江鰐をほうふつとさせる。…揚子江鰐が『龍のごとき』ものとみなされていたことは疑いなく、沙悟浄は龍の役割をになつてゐる、という(5)と同じ書。
- (13) 俵まちの、きびだんごは「一つで鬼退治についていくほどの馳走なのか、粗食なのか」という質問に対して、鳥越信は「それはもう粗食というイメージでしょうね。米・麦がふつうの主食で、粟、豆がそれに次いで、稗、きびとなる」と答えている(半藤一利編『昭和史が面白い』一九九六、文芸春秋社)。
- (14) 鬼と病気を結びつける考えは、古くからあった。仏教でも、ある種の病気は鬼が引き起すと考えられた。法華経の中に書いてある富多羅といふ鬼は、熱病を起す鬼で、毘舍邪といふ鬼は、癩癩を起す鬼であった。
- (15) 島山石燕『百鬼夜行』一九六七、渡辺書店。
- (16) 内田知也編『湯島聖堂と江戸時代』に、神農像(木像)の写真が出ている。同書に將軍綱吉が画いた神農像の絵も出ているが、それも頭に角がある。
- (17) 朝鮮には、牛頭という名前や地名が多いといわれる。例えば須佐之男命は新羅の曾屍茂梨から出雲に渡ってきたと伝えられるが、白鳥庫吉によれば、「曾屍茂梨といふのは、朝鮮の言葉で牛頭といふ意味」とのことである。(『日韓交渉開始に関する古伝説』、『白鳥庫吉全集』第二巻)。それは牛頭が本来は尊ぶべき概念であつたことを示している。
- (18) 宮田登編『ふるさとの伝説四 鬼・妖怪』ぎょうせい。
- (19) 高橋昌明「鬼と天狗」、『岩波講座日本通史第八巻 中世2』一九九四。
- (20) 小松和彦『鬼が作った国・日本』一九八五、光文社。
- (21) 『日本児童文学体系1 巖谷小波集』一九七七、ほるぷ出版。
- (22) 『扶桑国に就いて』、『白鳥庫吉全集』第九巻。
- (23) 『芥川龍之介全集』第三巻、一九七二、筑摩書房。
- (24) 『偏見』、『芥川龍之介全集』第五巻(一九七一、筑摩書房)所収。宮坂寛編「芥川龍之介年譜」(『芥川龍之介全集総索引 付年譜』所収、一九八三、岩波書店)の、一九二一年(大正十年)四月二六日に、「鄭孝胥(のち満州国総理)、章炳麟(革命派の文人)と会う」と記されている。
- (25) 関口安義『芥川龍之介とその時代』一九九九、筑摩書房。
- (26) 加賀孝英「笹川良一黒幕への道」に出ている岩田幸雄の回顧談、『文芸春秋』一九九三年一〇月。
- (27) 百田宗治の詩「桃太郎出陣」(一九四四)は戦時色の強いものであった。
桃太郎が進軍する 桃太郎が隊伍を組む
どつしどつしと足踏みする
- 日本中の桃太郎が出陣する 一人残らず出陣する
戦場に向つて出陣する 海と空へ 出陣する
- (28) 童話集『椋鳥の夢』(一九三八)所収、引用は『浜田広介全集』第四巻(一九七六、集英社)による。
- (29) 野村(2)の書所収。

△付△

国際政治経済学部田村紀之教授、文学部竹野静雄教授、山口直孝教授より資料の提供を受けました。記して感謝の意を表します。